

病害虫発生予察情報予報第12号(4月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)	
麦類	赤かび病	多	 赤かび病	
	うどんこ病	並		
1. 赤かび病 播種時期等の違いにより出穂日が異なるため、圃場をよく観察し、適期に防除する。大麦の防除適期は、葯殻抽出期(出穂期の約2週間後)であり、その7日後頃に2回目の散布を行うと、更に効果が高まる。小麦の防除適期は、開花始め～開花期(出穂期の約7～10日後)であり、開花10～20日後頃に2回目の散布を行うと更に効果が高まる(詳細は令和8年3月18日付病害虫対策資料第17号参照)。				
大麦	網斑病	やや多		
	1. 網斑病 防除適期である出穂期～穂揃い期の薬剤散布を徹底する。			
水稻	いもち病	並	 いもち病	
	ばか苗病	並		
1. いもち病 種子更新と既存の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種籾消毒を徹底する。				
タマネギ	べと病	早生マルチ	並	 べと病 二次感染株
		中晩生	並	
	ボトリチス葉枯症		やや多	
	ネギアザミウマ		並	
1. べと病 3月に引き続き4月も主要感染期である。べと病は条件が整うと感染と発病を繰り返し急激にまん延するため、引き続き注意が必要である。「一次感染株の抜き取り徹底」と「降雨前の定期的な薬剤の予防防除」を地域ぐるみで確実に実施する(令和8年3月18日付け病害虫対策資料第18号参照)。				
2. 細菌性腐敗症(腐敗病、軟腐病) 発生が散見される。発病株の早期除去、強風雨の前後の予防防除を行う。				
施設果菜類	1. 虫害全般(アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類) 気温の上昇に伴い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。			
	2. 病害全般(灰色かび病、菌核病、すすかび病、葉かび病、べと病、うどんこ病、疫病、褐斑病) 加温機の稼働頻度が低下し、植物体への結露が生じやすい時期である。こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐとともに、発病部位の早期除去、予防的な薬剤防除を行う。			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)	
イチゴ	うどんこ病	並	 ハダニ類	
	灰色かび病	並		
	ハダニ類	多		
	アブラムシ類	やや少		
	1. ハダニ類 今後、気温の上昇に伴い、さらに増殖し防除が難しくなるので、早期発見、早期防除に努める。防除効果を高めるため、薬剤散布前に古葉を除去し、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する（令和7年12月24日付け病虫害発生予察注意報第3号参照）。 2. 炭疽病 近年、本病の発生が問題となっている。病原菌の伝染を防止するため、ビニル雨よけ育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。また、過度な灌水は発病を助長するため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する。			
キュウリ	べと病	並	 キュウリ黄化えそ病	
	うどんこ病	並		
	褐斑病	多		
	灰色かび病	並		
	アザミウマ類	並		
	コナジラミ類	並		
	1. 褐斑病 平年より発生が多く、今後も気温の上昇に伴い発病の増加が懸念される。こまめな換気や早朝加温により高湿度条件が続かないように努めるとともに、少発生のうちから定期的な薬剤防除を実施する。 2. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 媒介虫の早期発見・早期防除を徹底する。また、ウイルス病の罹病株は伝染源となるので、圃場外に持ち出し、適切に処分する。			
トマト	葉かび病	並	 黄化葉巻病	
	灰色かび病	やや少		 黄化病
	コナジラミ類	並		
	1. コナジラミ類：黄化葉巻病、黄化病 気温の上昇に伴い、施設内の媒介虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。これらを抑制するため、低密度時からの定期的な薬剤散布を行う。なお、耐病性品種でも感受性品種と同様に防除を実施する。			
アスパラガス	アザミウマ類	並		
	1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 立茎開始初期から定期的に薬剤防除を行う。また、茎枯病の発病茎は伝染源となるため、見つけ次第早急に除去し処分する。			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
	1. 果樹カメムシ類 本年のチャバネアオカメムシの平均越冬虫数は平年より多いことから、本年4～7月の本虫の発生量は平年より多いと予想される。なお、果樹園への飛来は地域によって異なるため発生動向に注意するとともに、圃場をよく観察し、飛来を確認したら早急に防除を行う（令和8年3月25日付け病虫害発生予察注意報第4号参照）。		
カンキツ	そうか病	やや多	 かいよう病（葉）
	かいよう病	多	
	ミカンハダニ	多	
1. かいよう病 前年発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、展葉初期の防除を徹底する。			
2. ミカンハダニ 冬季にマシン油乳剤を散布していない等でミカンハダニの発生が多い園では、殺ダニ剤を散布する。			
ナシ	黒星病	やや多	
	1. 黒星病 本病の重要な防除時期である開花直前～落弁期は、7～10日間隔で薬剤防除を徹底する。SSで散布を行う場合は、必ず全列散布を行う。なお、降雨が続く場合はDMI剤の追加防除を行う。		
ブドウ	黒とう病	やや多	
	1. 黒とう病 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期～生育初期の薬剤防除を徹底する。		
キウイフルーツ	かいよう病		 かいよう病菌を含んだ樹液の漏出
1. かいよう病 本病の特徴として、枝や幹から乳白色あるいは赤褐色の樹液（かいよう病菌を含む樹液）が漏出する症状がみられる（右写真参照）ので、発見した場合は直ちに切除する。また、すべての園において、6月まで感染防止のため銅水和剤を主体とした定期的な薬剤防除を徹底する。			
茶	カンザワハダニ	やや多	 カンザワハダニ
	1. チャトゲコナジラミ 薬剤の防除効果は若齢幼虫期が高いので、成虫発生ピークの2週間後頃（目安は、成虫が発生ピークを過ぎて見られなくなった頃）を中心に防除を行う。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
キク	白さび病	並	 クロゲハナアザミウマ
	アザミウマ類	並	
	アブラムシ類	並	
	ハダニ類	やや少	
	ハモグリバエ類	並	
	1. アザミウマ類 発生が散見されている。多発生すると防除が困難となるため、圃場の状況をよく観察し、低密度時から防除する。		

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji003101844/index.html>

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（4ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

4月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する4月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和8年3月19日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における4月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	10 (15.3℃)	80	高い
降水量	20	40 (161.7mm)	40	やや多い

Ⅲ. 4月の予報

麦類

[【概要に戻る】](#)

定期調査:44圃場（大麦22圃場、小麦22圃場）
調査日：3月16日～17日

1. 赤かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 4月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 播種時期等の違いにより出穂日が異なるため、圃場をよく観察し、適期に防除する。

(2) 大麦の防除適期は、蒴殻抽出期（出穂期の約2週間後）であり、その7日後頃に2回目の散布を行うと、更に効果が高まる。なお、本病にやや弱い「はるか二条」「しらゆり二条」については、2回防除を基本とする（詳細は令和8年3月18日付病害虫対策資料第17号参照）。

(3) 小麦の防除適期は、開花始め～開花期（出穂期の約7～10日後）であり、開花10～20日後頃に2回目の散布を行うと更に効果が高まる。なお、本病の発生が多いパン用小麦については、2回防除を基本とする（詳細は令和8年3月18日付病害虫対策資料第17号参照）。

2. 網斑病（大麦）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率 1.5%（平年9.6%、前年11.4%）

平年比：やや少〈-〜±〉

(2) 4月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除適期である出穂期～穂揃い期の薬剤散布を徹底する。

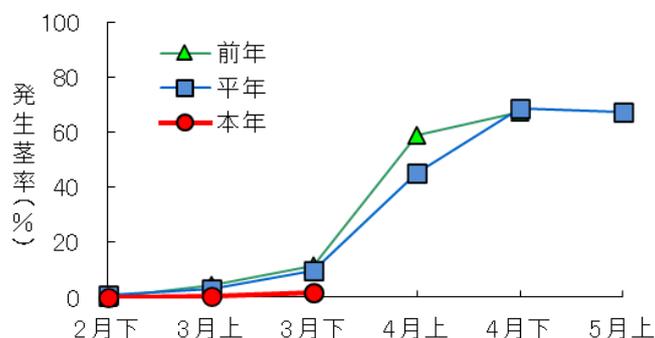


図1 オオムギ網斑病の発生推移
(2月下旬、3月上旬の平年値は過去6年平均)

水稻

[【概要に戻る】](#)

1. いもち病（苗いもち）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和7年産水稻での穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稻（8月上旬）で8.0%（平年4.2%）、北部山間の早植え水稻（9月上旬）で0.7%（平年6.8%）、普通期水稻（10月上旬）で3.9%（平年12.7%）であり、早期では平年よりやや多く、早植えおよび普通期では平年よりやや少なかった。（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 種子更新と既存の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種籾消毒を徹底する。
- (2) 育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいので、覆土を適正に行う。
- (3) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。
- (4) 長期残効型の育苗箱施薬剤を施用する。

タマネギ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 18 圃場、防除員 4 圃場
調査日：3月13～17日

1. ベと病（早生マルチ）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0.26%（平年1.9%、前年0.04%）
平年比：やや少（一～±）

(2) 感染好適気象条件の出現状況

県内及び隣接県の気象観測地点計4地点での2月21日～3月21日時点の気象解析の結果、感染および準感染好適条件の地点あたり出現回数の積算値は概ね平年並に推移している（図2）（±）

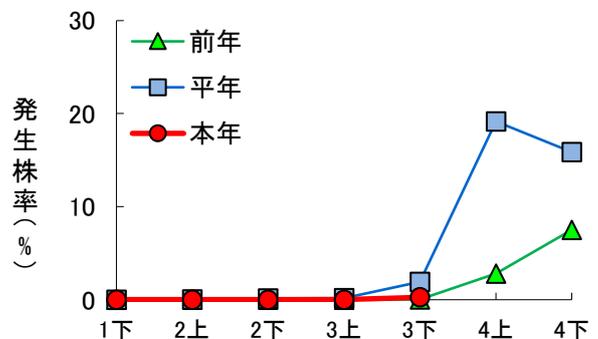
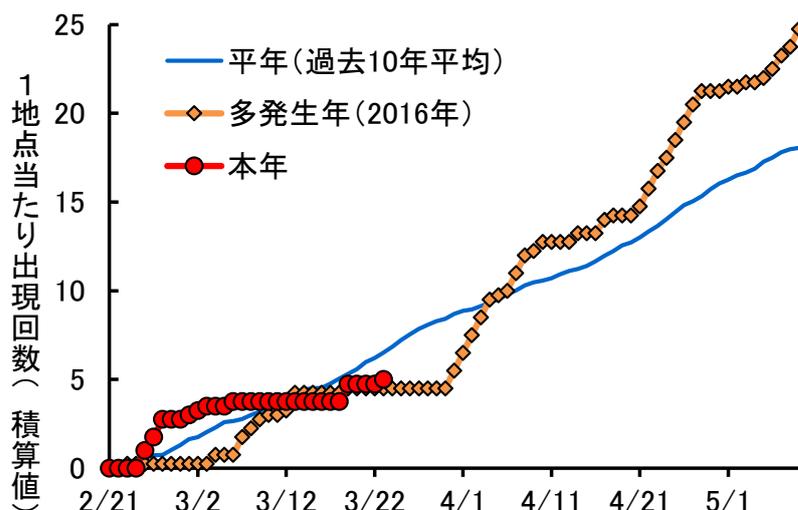


図1 早生タマネギでのべと病の発生推移



早生：主要感染期 ←————→
中晩生：主要感染期 ←————→

図2 タマネギべと病の感染・準感染好適気象条件の出現延べ回数

- 注1) 1地点当たりの感染・準感染好適条件の出現回数の積算値を示した。
注2) 感染・準感染好適条件が現れた場合、感染株では約2～3週間後から、初発生あるいは発病株（病斑数）の増加が予想される。

- (3) 4月の気象予報
 気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 一次感染株は見つけ次第除去する。
 (2) 週間天気予報に注意し、定期的な薬剤の予防防除を降雨前に確実にを行う。

2. ベと病（中晩生）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率：0%（平年0.8%、前年0%）

平年比：やや少〈-〜±〉

(2) 感染好適気象条件の出現状況

県内及び隣接県の気象観測地点計4地点での2月21日～3月21日時点の気象解析の結果、感染および準感染好適条件の地点あたり出現回数の積算値は概ね平年並に推移している（図2）〈±〉

(3) 4月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 一次感染株は見つけ次第除去する。
 (2) 週間天気予報に注意し、定期的な薬剤の予防防除を降雨前に確実にを行う。

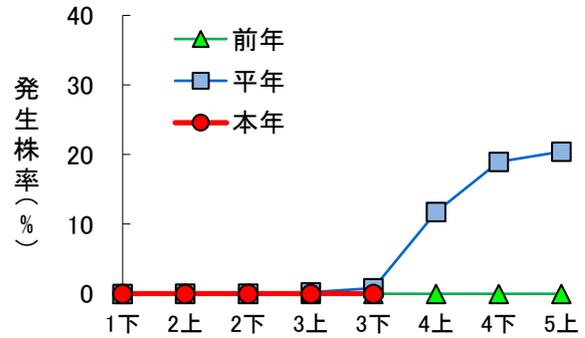


図2 中晩生タマネギでのべと病の発生推移

3. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年1.9%、前年0.1%）

平年比：並〈±〉

(2) 4月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 予防的な薬剤散布に努め、特に曇雨天が続くことが予想される場合は徹底する。
 (2) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。

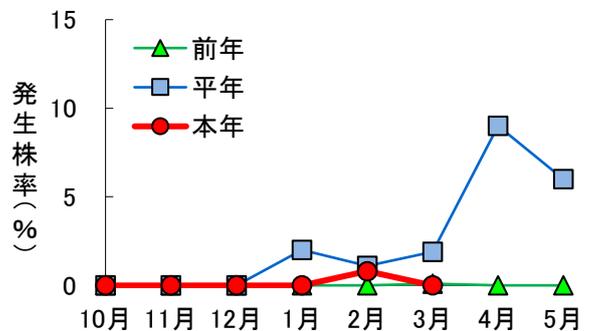


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

4. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：1.6%（平年5.5%、前年0.7%）

平年比：やや少〈-〜±〉

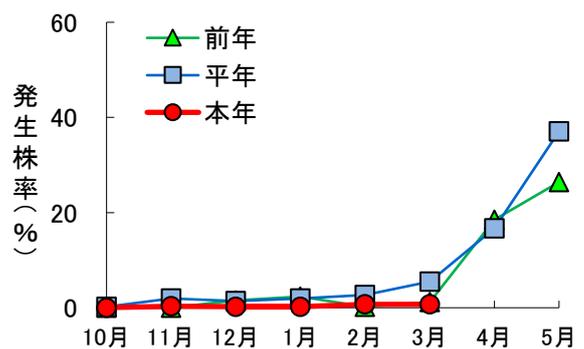


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

(2) 4月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生を認めた圃場では、低密度時から薬剤防除を行う。

(2) 本虫は薬液のかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、薬剤はそれらの部位にもかかるよう、生育に応じた十分量を丁寧に散布する。

イチゴ（本圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場

調査日：3月12～19日

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

発生株率：46.8%（平年27.2%、前年23.5%）

平年比：多〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生圃場では、系統が異なる薬剤を組み合わせ、5～7日間隔で防除を実施し、密度低下を図る。

(2) 薬剤散布前に古葉を除去し、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

(3) その他については、令和7年12月24日付け病害虫発生予察注意報第3号参照。

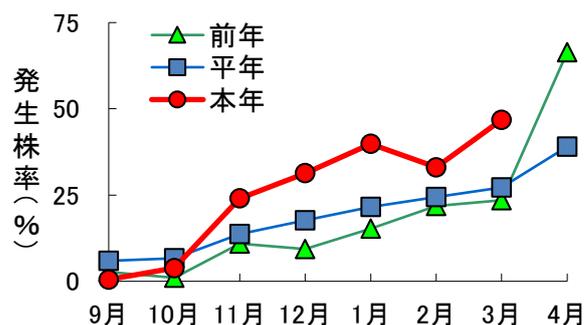


図 ハダニ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 5 圃場、防除員 2 圃場

調査日：3月16～18日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

発生株率：7.9%（平年5.7%、前年1.7%）

平年比：並〈±〉

(2) 4月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

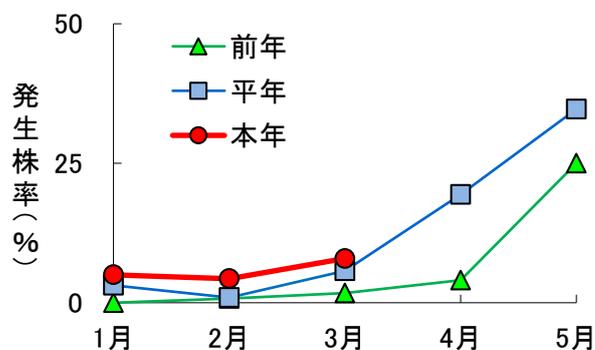


図1 キュウリべと病の発生推移

- (1) 加温機の稼働頻度が低下し、植物体への結露が生じやすい時期である。こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐ。
- (2) 発病部位の早期除去、予防的な薬剤防除を行う。

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：5.7% (平年 1.1%、前年 1.1%)

平年比：多 (+)

(2) 4月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 加温機の稼働頻度が低下し、植物体への結露が生じやすい時期である。こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐ。
- (2) 不要な下葉は除去し圃場外で適切に処分する。
- (3) 少発生のうちから定期的な薬剤防除を行う。

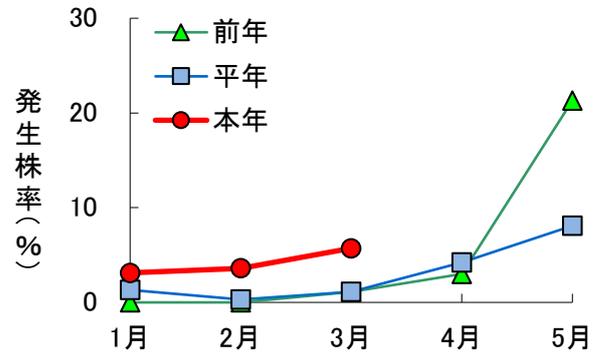


図1 キュウリ褐斑病の発生推移

3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.7% (平年 3.3%、前年 2.8%)

平年比：やや少 (-~±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温の上昇に伴い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。
- (2) ミナミキイロアザミウマは黄化えそウイルスを媒介するため、早期発見、早期防除に努める。また、罹病株は伝染源となるので、圃場外に持ち出し、適切に処分する。

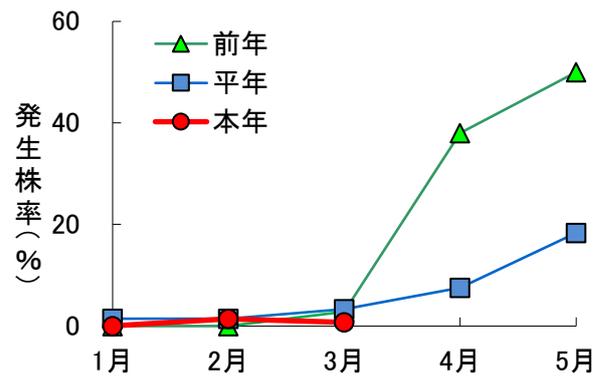


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.7% (平年 1.1%、前年 1.7%)

平年比：並 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温の上昇に伴い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。

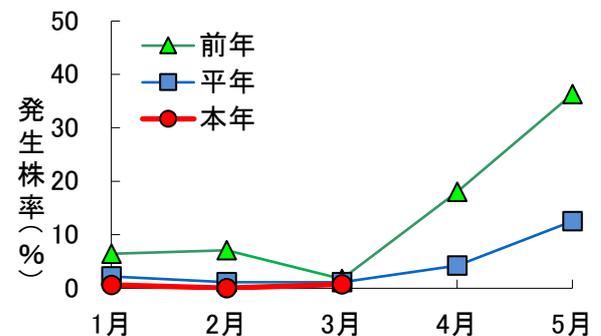


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

(2) タバココナジラミは退緑黄化ウイルスを媒介するため、早期発見、早期防除に努める。また、罹病株は伝染源となるので、圃場外に持ち出し、適切に処分する。

トマト

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6 圃場、防除員 4 圃場

調査日：3 月 16～18 日

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生株率：0.5% (平年 5.9%、前年 5.0%)

平年比：少 (ー)

(2) 4 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±～+)

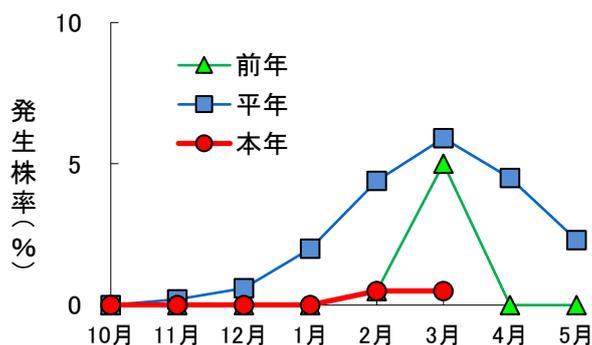


図1 トマト灰色かび病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 加温機の稼働頻度が低下し、植物体への結露が生じやすい時期である。こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐとともに、発病部位の早期除去、予防的な薬剤防除を行う。

2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生株率：5.0% (平年 5.9%、前年 7.0%)

平年比：並 (±)

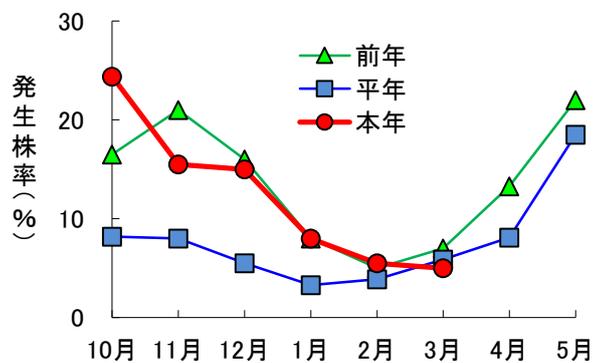


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫・蛹は中～下位葉に寄生していることが多いため、不要な葉は除去し、適切に処分する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。抵抗性発達のおそれ小さい気門封鎖剤も活用する。
- (3) 耐病性品種でも感受性品種と同様に防除を実施する。
- (4) ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に除去処分するとともに、コナジラミ類に対する薬剤防除を継続的に実施する。

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査（表1）

①越冬地点率：88.2%（平年44.1%、前年29.4%）

平年比：多〈+〉

②平年越冬虫数：2.51頭/m²（平年0.32頭/m²、前年0.14頭/m²）

平年比：多〈+〉

(2) 4月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本年4～7月における本虫の発生量は平年より多いと予想される。ただし、越冬密度は地域によって異なるため発生動向に注意するとともに、圃場をよく観察し、飛来を確認したら早急に防除を行う。

(2) その他については、令和8年3月25日付け病害虫発生予察注意報第4号参照。

表1 チャバネアオカメムシの越冬状況¹⁾

調査地域	本年 ²⁾	平年 ³⁾	前年	多発年 (H30)
	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²
みやき町	4.3	0.4	0	1.0
神崎市	11.7	0.6	0.7	0.7
佐賀市	2.0	0.2	0.3	0
小城市	0	0.1	0	0
多久市	0	0.2	0	1.0
唐津市1	4.0	0.5	0	0
唐津市2	0.3	0.3	0	0.3
伊万里市1	1.0	0.0	0	0
伊万里市2	2.3	0.4	0	0.7
伊万里市3	0.7	0.3	0	1.3
武雄市1	2.0	0.2	0	0.3
武雄市2	0.3	0.5	0.3	1.3
鹿島市1	1.0	0.5	0.7	1.3
鹿島市2	2.3	0.7	0.3	2.7
鹿島市3	1.3	0.4	0	0.7
太良町1	1.0	0.0	0	0
太良町2	8.3	0.4	0	1.3
平均	2.51	0.32	0.14	0.70
越冬地点率(%)	88.2	44.1	29.4	68.4

1) 各地点3カ所(1m²/1カ所)の落葉中の越冬虫数の平均

2) R7年12月に常緑樹林の落葉を採集して調査

3) 平年値はH28～R7の10年間の平均

定期調査：8 圃場
調査日：3 月 16～17 日

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図 1 参照)

発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 4 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 温州みかんでは、展葉初期 (最も伸びた新梢が 1cm 程度) に必ず薬剤防除を実施する。

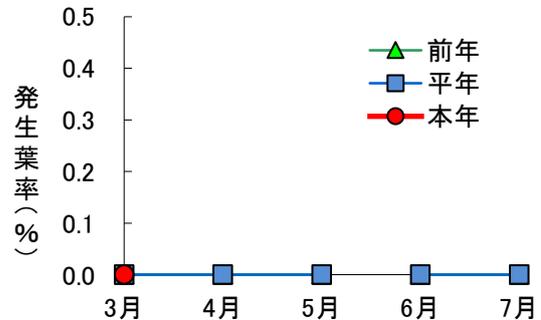


図 1 カンキツそうか病の発生推移

(注：5 月下旬までは旧葉、6 月以降は新葉を調査)

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図 1 参照)

発生葉率：0.14% (平年 0.01%、前年 0%)

平年比：多 (+)

(2) 4 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前年発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種 (レモン、ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) では、展葉初期の防除を徹底する。

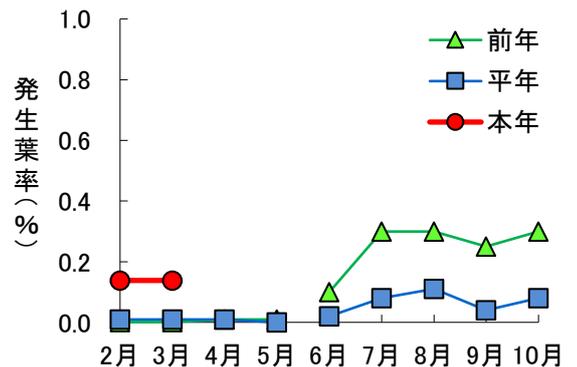


図 1 カンキツかいよう病の発生推移

(注：5 月下旬までは旧葉、6 月以降は新葉を調査)

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図 1 参照)

発生葉率：15.0% (平年 4.5%、前年 1.0%)

平年比：多 (+)

(2) 4 月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

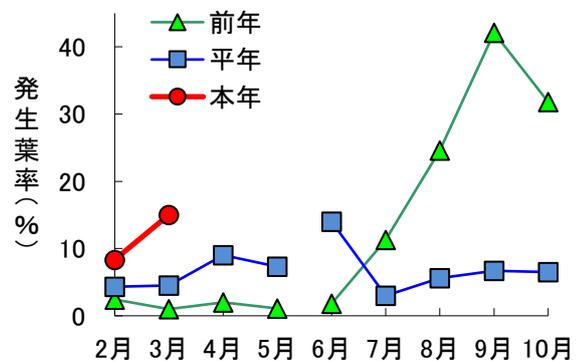


図 1 カンキツでのミカンハダニの発生推移

(注：5 月下旬までは旧葉、6 月以降は新葉を調査)

(1) 冬季にマシン油乳剤を散布していない等でミカンハダニの発生が多い園では、殺ダニ剤を散布する。

ナシ

[【概要に戻る】](#)

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 昨年秋の発生状況

① 定期調査（令和7年9月）

発生葉率：0%（平年0.2%、前年0%） 平年比：並（±）

このことから、園内の菌密度は平年並と考えられる。

(2) 4月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病の重要な防除時期である開花直前～落弁期は、7～10日間隔で薬剤防除を徹底する。SSで散布を行う場合は、必ず全列散布を行う。なお、降雨が続く場合はDMI剤の追加防除を行う。

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 昨年秋の発生状況

① 定期調査（令和7年9月）

発生葉率：0.7%（平年0.4%、前年0.7%） 平年比：やや多（±～+）

このことから、園内の菌密度は平年よりやや多いと考えられる。

(2) 4月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期～生育初期の薬剤防除を徹底する。

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7園場

調査日：3月16～17日

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

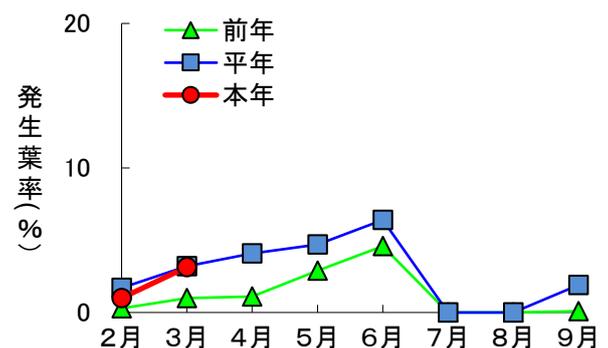


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率 : 3.1% (平年 3.2%、前年 1.0%)

平年比 : 並 (±)

(2) 4月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発後の薬剤散布では防除効果が不十分となるため、萌芽前までの防除を徹底する。

(2) 一番茶萌芽後に発生がみられた場合は、摘採前日数に留意し防除を行う。

(3) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

キク

[【概要に戻る】](#)

定期調査 : 8 圃場

調査日 : 3月16~17日

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率 0% (平年 2.5%、前年 0%)

平年比 : やや少 (-~±)

(2) 4月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 換気を行うなど施設内の適切な湿度管理に努めるとともに、発病前からの定期的な薬剤散布を実施する。

(2) 発病を認めたら、罹病葉は除去し、圃場外へ持ち出し適切に処分する。

(3) 散布する際は、葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。

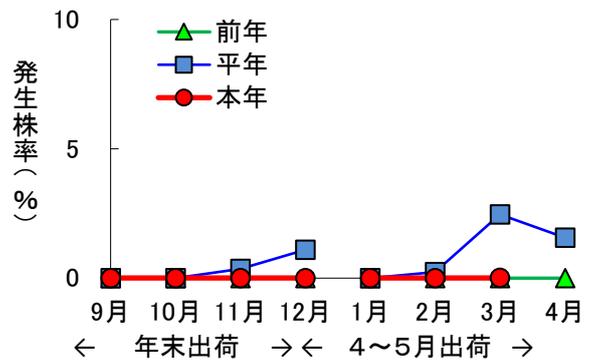


図1 キク白さび病の発生推移

2. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量 : 平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率 : 5.0% (平年 3.8%、前年 3.8%)

平年比 : 並 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。

(2) 施設内の侵入を防止するために、開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを被覆する。

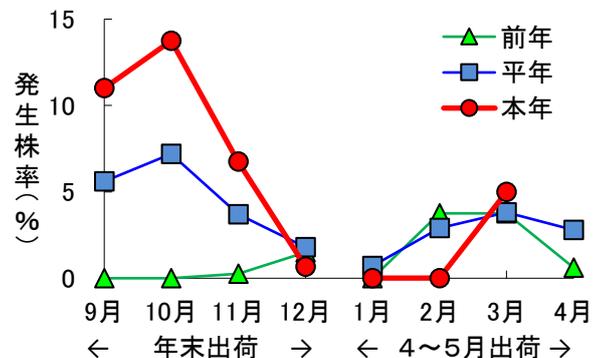


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

- (3) 今後、気温の上昇に伴い、本虫の増殖が盛んになるため、低密度からの防除を実施する。本虫は、薬剤のかかりにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。
- (4) キクえそ病 (TSWV)・茎えそ病 (GSNV) は、主にミカンキイロアザミウマが媒介する。発病株を認めた場合速やかに取り除き、媒介虫の防除を徹底する。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率 0% (平年 1.3%、前年 0%)

平年比：やや少 (ー±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発してからでは防除が困難となるため、圃場をよく観察して早期発見に努める。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

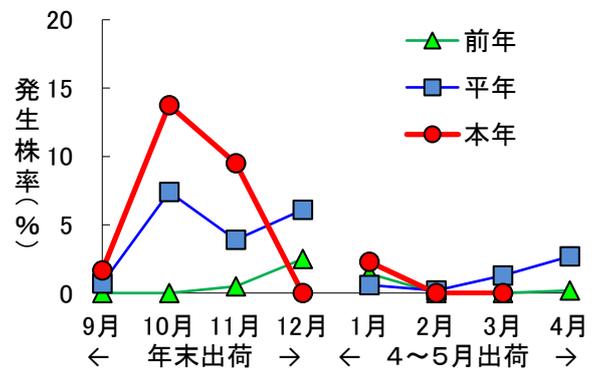


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi_jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

病虫害総合防除計画掲載アドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

防除セ二次元コード



防除計画二次元コード

